

## 〈論文〉

## アイヌ語静内方言の格助詞

奥田 統己

## 目次 はじめに

- 1 資料および分析方法
- 2 先行研究
- 3 格助詞の統語論上の特徴
- 4 個々の格助詞の記述
- 5 付：本誌1号・3号・4号所載の拙稿に関する訂正と補足  
参考文献

キーワード：アイヌ語、格表示、格助詞、後置詞

## はじめに

本誌1号(1995)に掲載した拙稿「アイヌ語静内方言の接続助詞」、3号(1997)に掲載した「アイヌ語静内方言の副助詞と終助詞」および4号(1998)に掲載した「アイヌ語静内方言の後置副詞」に引続き、本稿ではアイヌ語静内方言の格助詞すなわち文中の名詞句に後続して格関係を表示する助詞の意味・機能について考察する。

同じ方言についてはすでにREFSING(1986)が総合的な記述を行っており、本稿はその記述に対して修正・補足を試みたものである。また本稿が対象とする領域についてはすでに知里真志保(北海道・樺太全般)田村すず子(主に沙流方言)浅井亨(石狩方言)らを中心とした研究者による分析が示されている。

以下では静内方言の格助詞について、まず統語論的特徴に関する先行研究を概観し、ついで筆者による統語論的特徴の分析を示し、そのうえで個々の語について、先行する分析を随時参照しながら、記述する。

また本誌1号(1995)3号(1997)4号(1998)に掲載したアイヌ語静内方言の文法記述にいくつかの誤りと漏れがあった。読者の皆さんにお詫びし、ここで付録として修正・補足した記述を収録する。

モニターとして本稿を読み貴重なご意見をくださった先生がた、また個人的に本稿を読んでご意見をくださった切替英雄氏にこの場を借りてお礼を申し上げる。

## 1 資料および分析方法

拙稿(1995、1997、1998)と同様、本稿が資料とするのは北海道日高地方中部の静内町に在住した織田ステノさんが語った口頭文芸を中心とする延べ約11万語のテキストである。これらのテキストはいずれも、静内町教育委員会があるいは同委員会の委託を受けた筆者が採録したもので、筆者が録音からの文字化を行った。その大半は静内町教育委員会(編)(1991-1995)として対訳のうえ公刊されている。

本稿にまとめた分析を筆者が本格的に始めたのは話者が死亡したあとである。そのため本稿での記述は基本的にテキスト中の用例から導かれる支配的な用法の指摘にとどまっている。そこで記述の信頼性についての情報を補うためそれぞれに用例の概数を付記した。

本稿の資料は英雄叙事詩などの口頭文芸を中心としており、会話的な資料をほとんど含んでいない。したがって本稿の分析は、日常会話での用法というよりは口頭文芸に特徴的な用法を反映したものである。なおREFSING(1986、p.65)によれば、同書の記述は口語資料と口頭文芸との双方に基づいているとされる。

また拙稿(1995)で述べたとおり、織田さんのアイヌ語は、現在得られる資料から推測される静内川上流の他の話者の方言に比べて、いくつかの点でより北海道東部的な特徴を持っている。そのため静内地方全体のアイヌ語を把握するためには、織田さんの言葉とその他の話者の言葉とを突き合わせて行く作業が今後必要である。

## 2 先行研究

2.1. 知里(1942、p.575ff.)は「第四種の助詞(格助詞)」というセクションを設け、その総説として次のように述べている。

日本語で格助詞と称するものに相当する。名詞にのみ付き、それと共に連用修飾句を造る用法の他に、連体修飾句を造る用法を併せ有するものもある。大部分独立的(副詞的)用法を有する。

「連体修飾句を造る用法」が具体的に示されているのは*nenō*、*ta*および*un*である。また知里(1953、p.11)は「専ら名詞に附いていわゆる格関係を示し、常に続く分節をつくる」種類の助詞を「第4種」とし、*ta*や*un*などがこの種に属するとしている。

田村(1960:70)はアイヌ語の助詞の下位分類についてまとめるなかで格助詞を次のように定義している。

名詞的形式+□=副詞的形式　の□の位置にはいることのできるもの

さらに田村(1988、p.47)は「格助詞(後置助詞)」のセクションで、「名詞句に後置され、次の

語句との関係を示す語」のなかで「特に独立性の弱い、文頭、節頭には現われないもの」があるとし、『後置助詞』とでもよぶべきものであるが、便宜上、「格助詞」とよぶ。しかし、これは、主格や対格や属格などを表すものではない」と述べている。ここに含まれる助詞のうちtaとunの記述のなかには「連用句をつくる」「連体句をつくる」の2つの働きが示されており、残りのものには連用句を形成している例だけが示されている。

浅井（1969、p.787）は「格助詞」について「名詞的形式（位置名詞を含む）の後につく助詞である。連用修飾形式をつくることが多い」と記述している。

本稿の直接の先行研究であるREFSING（1986、p.164）はcase postpositions（格後置詞）という項目を立て、次のように述べている。

Case postpositions mark those adjuncts which stand in a case relationship to the predicate i. e. relational adjuncts or phrases. ... The genitive is expressed by the belonging form or by attributive postpositions.

仮訳：格後置詞は、述語との格関係を有するアジャнкт、すなわち関係アジャнктまたは関係句に標識を付ける。（中略）属格は所属形または修飾後置詞によって表現される。

そしてattributive postpositions（修飾後置詞）の働きを次のように規定している(p.164)。

An attributive postposition serves to mark the noun which precedes it as an attribute of the noun which follows it.

仮訳：修飾後置詞は、それに先行する名詞を、後続する名詞の修飾語として標示する。

ここで具体的に示されているのは、後続する名詞の場所を示すun、属するグループを示すne、所有者を示すkorである。

以上のうち、田村（1960）およびREFSING（1986）による格助詞／格後置詞の記述が言及しているのは、副詞的形式を作るまたは述語との格関係を表示する、つまり知里（1942）のいう「連用修飾句を造る」機能のみである。ただしREFSING（1986）は連体修飾句を作る助詞として格助詞とは別にattributive postpositionsという品詞を立てている。これに対し、知里（1942）田村（1988）はアイヌ語の格助詞の機能として知里（1942）のいう「連体修飾句を造る」働きを明示している。そして田村（1988）が「連用句をつくる」「連体句をつくる」2つの機能を与えているunを、REFSING（1986）はおそらく同音異義の別語としたうえで、case postpositionsとattributive postpositionsの両方の項目で記述している。

2.2. アイヌ語には、副詞として自立語的にも働くいっぽう文中のさまざまな要素に後続して助詞的にも働く一群の語が存在する。すでに拙稿（1998:128ff.）で概観したように、2.1.で参照した先行研究にはこれらの語を格助詞／格後置詞に含めるもの（知里（1942、1953）浅井（1969）REFSING（1986））と、後置副詞という別な品詞に分類するもの（田村（1960、1988））とがみられる。

2.3. 知里 (1953, p.11) は「第4種」の助詞に「それ以上分類する必要を認めない」と述べ、知里 (1942) も格助詞の明示的な下位分類を行っていない。浅井 (1969) も格助詞の下位分類を示していない。田村 (1960) も、格助詞については定義のみを示し、個別的な記述や下位分類は行っていない。

REFSING (1986, pp.164-170) はcase postpositionsのセクションにlocative (場所) allative (方向) ablative (起点) traversal (横断) comitative (共同) comparative (比較) instrumental (道具) mutative (変化) の8つの下位セクションを設けており、なかには複数の語を含むものもある。しかしこれらは基本的には下位区分というよりそれぞれの助詞の意味の表示と考えるべきである。

これらに対し田村 (1988, pp.47-49) は、以下の2つの下位分類を行っている。

i) 位置名詞、あるいは位置 (時間的、空間的) を表わす名詞句の後におかれるもの。位置格助詞ともよぶ。

ここに含めているのはta, un, wa, pekaの4語である。

ii) 特殊なもの。

ne l 語のみが含まれる。

そしてi)についてさらに、

これらは、通常、位置 (時、場所) を表わす名詞の後におかれるもので、ものを表わす名詞につくことはない。たとえばSapporoは場所を表わすので、Sapporo ta「札幌で、札幌に」といえるが、ciseは家というものを表わす語であり、taは直接つかない。ものを表わす語の後にこれらの助詞をおくには、その名詞の後にorという位置名詞をおく。orは、しいて訳せば「~のところ」であるが、訳せない場合もある。cise or ta (中略) は、「家で/に」。 (中略) ものを表わす語か、場所を表わす語かは、アイヌ語の中で決まっているのであって、日本語の訳語からは予測できないことがあるから注意を要する。

と説明している。

ここで述べられている「もの」であるか「場所」であるかによって、アイヌ語の名詞は形態統語論的に二分される。そして中川 (1984, p.151) が指摘しているように、この区分は格助詞が後続する場合だけでなく、動詞が後続する場合にも意味を持つ。なお「場所」である名詞の大半は、「上」「下」「内部」などの位置関係を表す「位置名詞」という品詞に属する。

### 3 格助詞の統語論上の特徴

3.1. 本稿では格助詞を、直前の名詞句と結びついて格関係を表示する付属語として定義する。この定義は実質的に田村 (1988) と同じである。

できあがった形式は主として副詞句となり述語動詞にかかる。しかし4.1.2. に示すtaには直後の名詞句にかかる連体修飾句を形成する用法もある。連体修飾句を形成する用法を先行研究が示しているそのほかの語のうち、nenohはここでの定義では後置副詞に分類される。また名詞句を修飾する

unは、以下のように人称接辞が接頭したり存在場所のほうが被修飾語になったりする例があることから、動詞un「～が～に常時ある／住む」の連体修飾用法とする（切替（1989, p. 349）参照）。

a=un	cise	nispa un	kotan
(私が) ～に住む	家	紳士	～に住む 村
「私が住む家」		「紳士が暮らす村」	

そのほかREFSING（1986）がattributive postpositionsとして示しているkorとneも、本稿ではそれぞれ動詞のkorとneであるとし考察の対象としない。

拙稿（1998）との用語の統一を図り、格助詞が受ける直前の名詞句を先行要素と呼ぶ。

3.2. すでに拙稿（1998:131）に述べたとおり、知里（1942、1953）浅井（1969）らが「独立的に（自立語的に）用いられる助詞」とした一群の語は格助詞ではなく後置副詞という品詞に分類する。後置副詞と格助詞のいずれに分類されるかは、もっぱら自立語と認定されるか付属語と認定されるかによる。そして拙稿（1998:132）で述べたように、資料中に自立的な用例のない語は付属語であるとみなし、格助詞として本稿で扱っている。

ただし4.2. で記述する「場所以外の名詞（句）をうける」グループのなかには、田村（1988）が沙流方言の分析のなかで後置副詞として示している語と語形・意味とも重なるものがある。またすでに拙稿（1998:131）は「格助詞的に働く後置副詞」についてプロトタイプ論的な分析を行っており、4.2. で記述するグループを「格助詞的に働く後置副詞」の特徴のうち自立語でない用法（拙稿1998:131のイ）だけを備えたものとも考えることもできる。しかし本稿および拙稿（1998）は自立語と付属語との区別をアイヌ語の品詞分類の基礎に置き後置副詞とその他の助詞とを区別する立場に立つ。

3.3. 2.3. で触れた「場所」か「もの」という名詞（句）のクラス分けは、本稿が扱う方言にも存在する。「場所」のクラスに属するのは、位置関係を表す名詞（位置名詞）、空間・時間を表す名詞・名詞化助詞の一部およびこれらを主要部とする名詞句である。

そしてやはり格助詞のなかには、「場所」の名詞（句）のみを受けるものと「もの」である名詞（句）のみを受けるものがある。本稿の資料中には、前者に属するものとしてta「～で、～に」un、unno、en、enno「～へ、～に」wa、wano「～から」peka「～を（通って）」、後者に属するものとしてekopas「～にもたれて」epitta「～の一面じゅう」epeka「～のために」ekari「～のまわりを」hekota「～に面して」ne「～として」okari「～のまわりを」tomotuye「～を横切って」が存在する。

前者のグループの助詞を「もの」である名詞（句）に後続させたい場合には、田村（1988, pp. 47-49）が述べているのと同様、その名詞（句）にorまたはoro「～のところ」というもっとも無標の位置名詞を後続させる。こうすることで名詞（句）+or/oro全体は「場所」の名詞句として扱われる。

3.4. or/oroと場所の名詞(句)を受ける格助詞とが結びついたかたちで、動詞句で終わる文に後続してその文の内容全体を先行要素としたり(1)、文頭に立ってそれまでの文脈中のある要素を先行要素としたり(2)することがある。先行要素を指示する目的格の人称接辞がor/oroに接頭すること(3)もある。この場合には、「or/oro+格助詞」全体が拙稿(1998)で記述した後置副詞としての性格を持っていると考えることもできる。

(1) wen ekasi i=koitak pokon yaynu=an or un moynak=an  
悪い 老爺 (私に) 話す ~みたいに (私が) 思う ところ ~へ (私が) 目覚める  
「悪い爺さんが私に話しかけているみたいに思ったところで私は目を覚ました」

(2) sinna cise a=kar hine or ta oka=an  
別な 家 (私が) 作る ~して ~のところ ~に (私が) 暮らす  
「別な家を私は作ってそこに暮らした」

(3) i=tapkomuye p an=esisuye yakka  
(私を) 羽交い締めする もの (私が) 振り回す ~しても  
i=or wa ratkiratki  
(私の) ところ ~から ぶらぶらぶら下がる  
「私を羽交い締めしているやつは振り回しても私からぶらぶらぶら下がっていた」

#### 4. 個々の格助詞の記述

##### 4.1. 場所の名詞(句)のみをうけるもの

###### 4.1.1. peka 「~を(通って)」

先行要素の線的・面的な広がりの中で、述語動詞の表す動作が行われることを示す。用例は10近く存在する。

多くの場合その動作は移動を伴うものであり(4)、その場合のpekaの意味は日本語の「を」のうち「道路を歩く」など自動詞とともに用いられるものと類似する。しかしある広がりの中での不存在を述べている例(5)や「横臥する」動作が行われる場所を示す用例(6)もある。先行要素が「人や動物など広がりを持たない名詞+or」である場合(7)は、その人や動物がおおぜいいるなかでの動作であることを示しているとみられる。

REFSING(1986, p. 168)は”Peka indicates space traversed in the sense of “through” or “over””としている。本稿の記述は田村(1988, p. 48, 1996, p. 519) 中川(1995, p. 342)により近い。

- (4) kim peka payeka=an  
山 ～を (私が) 歩き回る  
「山のなかを私は歩き回った」
- (5) iwor or peka yuk ka isam isepo ka isam  
猟場 のところ ～を 鹿 も いない 兎 も いない  
「猟場のなかに鹿もいない、兎もいない」
- (6) ape teksam peka hotke=an  
火 側 ～を (私が) 横臥する  
「火の側で私は横になった」
- (7) ... ari an cahaw cikap or peka seta or peka an=nu  
… と ある 噂 鳥 のところ ～を 犬 のところ ～を (私が) 聞く  
「『…』という噂を、鳥を介して犬を介して、私は聞いた」

#### 4.1.2. ta 「～で、～に、～の」

先行要素が述部の動作が行われる場所または時間(8)、あるいは移動する動作の到達点(9)であることを示す。用例は2000以上得られている。この記述はREFSING (1986, pp. 164ff.) と矛盾しない。

- (8) kiyanne yupo anak poro cise or ta an  
年上だ 兄さん ～は 大きい 家 のところ ～で 暮らす  
「年上の兄さんは大きい家で暮らした」
- (9) kucacise or ta sirepa=an  
狩小屋 のところ ～に (私が) 到着する  
「狩小屋に私は到着した」

(8)の述語動詞an「ある、暮らす」(複数形はoka)や(9)の述語であるsirepa「目的地に到着する」は、次項で記述するun/unno/en/ennoの作る句に修飾されている例がほとんどない。いっぽうhosipi (単数形) hosippa (複数形)「帰る、戻る」のような動詞には、taによる句が修飾する例(10)とun/enの作る句に修飾されている例とがみられる。

- (10) a=kor cise or ta hosippa=an  
(私が) 持つ 家 のところ ～に (私が) 帰る  
「私の家に私は帰った」

3.1. で述べたとおり、taには連体修飾句を形成する次のような用法がみられる。REFSING (1986)はこの用法を指摘していない。なおこの例文はアイヌモシリ (人間の国) の地下にあるポクナモシリ (地下の国) での戦いの場面におけるセリフなので、aynumosir taを連用修飾句とする解釈「アイヌモシリで…頑張りなさい」は成立しない。

- (11) aynumosir ta a=aktonoke tumpuorunkur arikiki  
 アイヌモシリ ~の (私の) 弟君 トゥンプオルンクル 頑張り  
 「アイヌモシリの私の弟君、トゥンプオルンクルよ、頑張りなさい」

#### 4.1.3. un、unno、en、enno 「~へ」

先行要素の方向へ向かって述語の動作が行われることを示す(12)。この意味はREFSING (1986, p. 165)によっても記述されている。un、unno、en、ennoの意味の違いは見出せなかった。unnoという形には「~のあとずっと」という意味での後置詞的な用法もあるが、この意味の場合には動詞に後続したり自立的に用いられったりすることがあるなど、統語論的にも格助詞のunnoとは区別される。拙稿 (1998:137) では「~のあとずっと」という意味のunnoを別語の後置副詞として記述した。

例(12)の述語動詞sikirpaおよびその単数形sikiruがun/enの作る句に修飾された例は10以上あり、taの作る句に修飾された例はない。すでに述べたとおり、動詞によってはtaによる句にもunによる句にも修飾されうる(13)。

- (12) an=saha utar cisehe or un sikirpa  
 (私の) 姉 たち ~の家 のところ ~へ 向きを変える  
 「私の姉たちは自分たちの家へ向かった」

- (13) e=sik'o cise or un hosipi kuni ramu  
 (お前が) 生まれる 家 のところ ~へ 帰る はずのこと ~を思え  
 「お前が生まれた家へ帰ることを考えなさい」

- (14) munnuye, mintar or unno too mosem oske unno pirkanuye hine  
 掃除する 土間 のところ ~へ ずうっと 入り口の物置 中 ~へ 美しく掃く ~して  
 「掃除して、土間へとずうっと入り口の物置の中へときれいに掃いて」

- (15) kotan pa en kotan kes un utar usaraye  
 村 上手 ~へ 村 下手 ~へ 仲間 分配する  
 「(戦いのときに) 村の上手へ村の下手へと手分けする」

- (16) rikunmosir enno kamuy utar an=nomi  
 リクンモシリ ~へ 神 たち (私が) 祀る  
 「リクンモシリ (神々の住む天上の国) へ私は神々の祀りをした」



また述語動詞が音などを聞くことを表すものであるときは、先行要素の方向からその音が聞こえてくることを表す(17)。中川裕氏の個人的教示および切替(1987)によれば、この用法はむしろアイヌ語の「聞く」動作が聞き手から音源のほうへ向かうものであることによる。さらには3.4.に掲げた例文(1)のようにmoynak「目覚める」yaynupa「気づく」などの覚醒に関係する動作が行われる時点をも表示する。切替(1996:235)は十勝方言のor enについて「意識を失う、あるいは意識がもどるという意味の句で」用いられるとしている。

以上あわせて600ほどの用例がある。

- (17) ne nusa or un nep ka kicitce hawe an=nu  
 その 祭壇 のところ ~へ 何 か きいきい言う 声 (私が) 聞く  
 「その祭壇のところから何かがきいきい言う声が聞こえた」

#### 4.1.4. wa, wano 「～から、～側に」

先行要素が、述語の表す動作の起点となる場所(18)であることを表す。また上下、左右など2つ以上の「側」がある場合に、先行要素の側で述語の表す動作が行われることを示す(19)(20)。先行要素がある時期・時代のこともあり(21)、その時期・時代から述語の表す動作が継続してまたは繰り返行われていることを表す。なおこの方言では、先行要素が点的な時間であるときには拙稿(1998:137)で記述した後置副詞のunnoまたはounnoを用いる。中川(1982, p. 99)はすでにこの方言の同様の現象について、unnoは先行要素の表す時点を境に述語の表す事態が実現することを表すのに対し、wanoでは始点そのものは明示されていないと指摘している。

or/oroを伴って動詞句の直後や文頭に立つときには、先行要素の内容に次いで後続する述語の内容が実現することを表したり(22)、いくつかの事態を並列的に列挙したりする。これらの用法では起点を示す意味は弱まっているといえることができる。

or/oroを伴い、受身文の動作主を表示する例(23)も多い。用例はあわせて460ほどである。

REFSING(1986, pp. 167-168)は奪格(「～から」)としてまた受身の動作主としての意味を示している。田村(1988, p. 48)による「座席を示す語の後」で用いられる例、中川(1995, p. 430)による「～〈場所〉で。～〈場所〉に。」と訳される千歳方言の例、田村(1996, p. 820-821)による「《…に》と訳される場合」の沙流方言の例も、「～側に」という本稿の解釈で説明できるようである。

- (18) a=kor huci nep ta upsoro wa sanke hine i=koturiri  
 (私が) 持つ 祖母 何 か 懐 ~から 出す ~して (私に) 差し伸べる  
 「私の祖母は何か懐から出して私に差し出した」

- (19) ika wa okay pe sukus cire  
 上 ~側に ある もの 日光 焼く  
 「(沼のなかの魚の群の) 上側にいるものは日光に焼かれている」  
 (魚の群が沼からあふれるほどであることの形容)

- (20) harkiso wa monaa wa okay pe an=nukar  
左座 ～側に 座る ～して いる もの (私が) 見る

「左座側に座っている人を私は見た」

- (21) teeta wano aynu payeka ruwe ka isam  
昔 ～から 人間 行き交う 様子 も ない  
「昔から人が通った様子もない」

- (22) hopunpa=an wa ipe=an wa oro wa sipinpa=an  
(私が) 起きる ～して (私が) 食事する ～して のところ ～から (私が) 身仕度する  
「私は起きて食事してそれから身仕度した」(前2つのwaは接続助詞)

- (23) a=kor yupo or wa an=i=uytek  
(私が) 持つ 兄さん のところ ～から (受身) (私を) 使いに立てる  
「私の兄さんに私はお使いをさせられる」

#### 4.2. 場所以外の名詞(句)をうけるもの

##### 4.2.1. ekari 「～をぐると回って」

先行要素の内側をぐると回りながら、述語動詞の動作が行われることを示す。本稿の資料中には4例のみ表れ、その先行要素はいずれもso「床」である。REFSING (1986, p.124) のが位置名詞の記述のなかには“around (outside)”の意味を持つ語としてsoyekariがある。拙稿 (1998:135) が示した後置副詞のekariは同音異義語となる。

- (24) a=kor hapo an=ekuwakor wa  
(私が) 持つ 母さん (私が) を杖にする ～して  
so ekari payeka=an  
床 ～をぐると回って (私が) 歩き回る  
「母さんを杖がわりにして私は家の床の上をぐると歩き回った」  
(大怪我をした娘が回復後歩く練習をしている場面)

##### 4.2.2. ekopas 「～にもたれさせて」

先行要素にもたれさせるようにして述語動詞の動作が行われることを表す。資料中には1例のみ存在する。意味を話者に確認したところ「よせかけて」だということであった。REFSING (1986) には記述がない。

- (25) an=uhuyka cise osmake ta sirkorkamuy ekopas an=roski  
(受身) 燃やす 家 背後 に 木の神様 にもたれさせて (私が) 立てる  
「(仮小屋を) 燃やされた家の背後に木の神様にもたれさせて私は建てた」

4.2.3. *epitta* 「～の一面じゅう」

先行要素の面全体にわたって述語動詞の動作が行われることを表す。資料中の用例数は10ほどである。例文(26)の *uhoyuppare* は *usa menoko usa okkay* を主語とする1項動詞(自動詞)なので、*iwor* は *epitta* によって格を付与されていると考えなければならない。REFSING (1986) は例文のなかでのみ示し(p. 266)、“everywhere”というグロスを与えている。

- (26) *usa menoko usa okkay iwor epitta uhoyuppare*  
 いろいろな 女 いろいろな 男 猟場 ～の一面じゅう みんな走り回る  
 「女だの男だのが、猟場の一面じゅう、みんなで走り回った」

4.2.4. *epeka* 「～のために」

先行要素を目的として述語動詞の動作が行われることを表す。同様の意味と機能を持つ語に拙稿(1998:138)が扱った *kusu* などがあるが、*kusu* が後置副詞として幅広く用いられるのに対し、*epeka* の用例は1つしかない。ただし意味は話者から得られている。*kusu* との意味の違いは未詳である。REFSING (1986) には記述がない。

- (27) *nep epeka ene annoski eci=arki*  
 何 ～のために こうして 真夜中に (お前たちが) 来る  
 「何のためにこうして真夜中にお前たちは来るのか」

4.2.5. *hekota* 「～に面して」

先行要素に面して述語動詞の動作が行われることを表す。ただし用例は2例でいずれも *ape hekota monaa* 「(囲炉裏の) 火に面して座る」であり、意味はこれらの用例から導いたものである。

- (28) *kiyanne aynu ape hekota monaa wa okay pe*  
 年上だ 人間 火 ～に面して 座る ～して いる もの  
 「年上の人で、火に面して座っているもの」

4.2.6. *ne* 「～として、～に」

文の主語または目的語が先行要素の性質を持って、述部の表す事態が実現することを示す(29)。また時を表す名詞句に後続して、述語の動作の行われる時点を表示する(30)。REFSING (1986, p. 170) は「変化の結果」を示すとしている。

- (29) *tane kamuy ne oka=an*  
 今 神 ～として (私が) 暮らす  
 「今や私は神となって暮らしている」

- (30) tan to ne rikunmosir a=kohosipi  
この日 ～に リクンモシリ (私が) ～に帰る  
「今日リクンモシリに私は帰る」

#### 4.2.7. okari 「～のまわりを」

先行要素の外側を回って、述語動詞の動作が行われることを表す。4.2.1. に記述したekariが先行要素の内部を回ることを示すと考えられるのに対し、okariは先行要素の周囲を回ることを示している。同形で「～が～の周囲を回る」という動詞も存在する。用例数は30弱である。

REFSING (1986) には記述がない。田村 (1988, p. 38) は同じ意味の後置副詞を示している。

- (31) e=ipe easkay ape okari e=reye  
(お前が) 食事する ～できる 火 ～のまわりを (お前が) 這う  
「(赤ん坊の) お前は食事もできるようになり、いろいろの火のまわりをはいはいした」

#### 4.2.8. tomotuye 「～を横切って」

面としての広がりを持つ先行要素を横切って、述語動詞の動作が行われることを表す。用例は20弱見られる。やはりREFSING (1986) には記述がなく、田村 (1988, p. 39) は同じ意味の後置副詞を示している。

- (32) atuy tomotuye terke=an  
海 ～を横切って (私が) 走る  
「海を横切って私は走った」

## 5 付：本誌1号・3号・4号所載の拙稿に関する訂正と補足

本誌1号・3号・4号所載の拙稿に、以下のとおり記述の漏れおよび誤りがあった。読者にお詫びし、補足・訂正する。

5.1. 本誌1号 (1995年3月) に掲載した拙稿「アイヌ語静内方言の接続助詞」から接続助詞koeunnoについての記述が漏れていた。なおこの接続助詞は、拙稿 (1995) の分類では4.1. 「主に前件と後件との時間的關係を表すもの」のグループに属すると考えられる。

#### 5.1.1. koeunno 「～するのと並行して」

前件と後件とが時間的に並行して実現することを示す。ただしここでの記述は、3例のみ得られている用例から帰納されたものである。REFSING (1986) には記述がない。

- (33) i=resu                    koeunno                    huciape ukasuy        wa  
 (私を) 育てる    ~するのに並行して 火の神 助け合う    ~して  
 an=i=resu                    wa        aynu ne        oka=an  
 (受身) (私を) 育てる    ~して 人間    として (私が) いる  
 「(カッコウの姉さんが) 私を育てたのと並行して火の神も助け合って、  
 私は育てられて大人になった」

5.2. 本誌3号(1997年3月)に掲載した拙稿「アイヌ語静内方言の副助詞と終助詞」中にいくつかの修正・補足点があった。なお日本語学会第115回大会(1997年10月)における筆者の研究発表「アイヌ語静内方言の疑問の副助詞」はすでにこれらの修正・補足に基づいている。

#### 5.2.1. … esta an aの末尾のaの解釈の修正

拙稿(1997:205)の例文(27)(28)では、これらのaを過去の助動詞として解釈し「した」というグロスを与えた。しかし、… esta an neの末尾の終助詞neと並行的に現れていることを考え、これらは終助詞yaの頭子音yが脱落したかたちだと解釈を訂正し、グロスを「か」に改める。ただしこれ以外の文脈で過去の助動詞aが文末に置かれることはなおありうる。

#### 5.2.2. 「文全体のモダリティーと呼応し、その焦点を指示する」副助詞の統語論的特徴についての補足

5.2.1.の修正に伴い、拙稿(1997:200)が「REFSING(1986)がsentence final forms(「文末形式」)と呼んだ表現のなかに現れ、文全体のモダリティーを強調する場合」とした用法を、以下のように具体的に分析する。

「文+名詞化辞+副助詞(+存在動詞(+終助詞))」と分析できる表現のなかに現れ、文全体のモダリティーを強調する場合

さらに次のような用法がそれぞれの副助詞に存在することを明示する。なおすでにREFSING(1986, p.114, p.237)は「文末形式」としてこの種の表現の存在を指摘している。(34)にこの用法のestaの例を示す。

「名詞句+副助詞+存在動詞(+終助詞)」という表現を構成し、文のモダリティーをそれぞれの副助詞が強調しつつ全体として「名詞句+コピュラ」という表現に相当する場合

- (34) *anun ka somo ne, ku=utari esta an ne.*  
他人 も 否定 である (私の) 親戚 こそ ある ぞ  
「他人ではない。私の親戚であるぞ。」

### 5.2.3. *enta*、*he*、*hetap*の機能の区別についての修正

拙稿 (1997) では副助詞*enta*と*he*との違いを、複数の選択肢を示して選択を求める疑問表現のなかで用いられるかどうかに求めた。しかし実際には(35)や(36)のように*enta*にも、複数の選択肢を示して選択を求める疑問表現のなかで、それぞれの選択肢に後続してまたは複数の疑問文のなかに現れるかたちで、用いられる例がある。

- (35) *ray pe enta siknu p enta parka a=kosina ruwe ne ya*  
死ぬ もの か 生きる もの か 梁 (受身) 縛る 様子 である か  
「死んでいるものが、あるいは生きているものが、梁に縛られているのか？」

- (36) *a=yupihi enta ahun ya, a=kor nispa enta ahun ?*  
(私の) 兄 か 中に入る か (私が) 持つ 旦那さん か 中に入る  
「私の兄が家の中に入ったのか、私の夫が家の中に入ったのか？」

上のような例および*he*についてのその後の考察に基づき、まず*he*の機能の記述を以下のように修正する。

疑いを含む文のなかで、疑わしい要素の直後に置かれる。この方言では直接の問いかけに用いた例はないが、話し手がその疑いの解明を望んでいるとみられる例が多い。*enta*に比較して、複数の選択肢を示して選択を求める場合に用いられる比率が高い。

また*he*の機能を上のように修正することに伴い、拙稿 (1997) が疑念を表すとした*hetap*と*he*との違いも再検討した。その結果*hetap*の機能の記述を以下のように修正する。

疑いを含む文のなかで、疑わしい要素の直後に置かれる。問いかけには用いられず、また疑いの解明が話し手にとって問題にならない例が多い。やはり複数の選択肢を示して選択を求める表現の例が比較的多い。

それぞれの例文は拙稿 (1997) を参照されたい。

5.3. 本誌4号 (1998) 所収の拙稿「アイヌ語静内方言の後置副詞」から、後置副詞*onuytasa*についての記述が漏れていたため補足する。

5.3.1. *onuytasa* 「～と入れ替わって」

先行要素と入れ替わって、述語の動作が行われることを表す。用例は10例得られている。いずれの例も先行要素と入れ替わりになったり、交互に交代したりすることを表している。これに対しすでに記述した*kawari*、*kawarine*、*okari*には、その場で交替することを表す例もすでにいなかった人の恒常的な代理つまり後継者になることを表す例も存在する。REFSING (1986) には記述がない。

- (37) *te unno a=korsi mici onuytasa e=ekimne*  
 今 ~から (私の) 息子 父さん ~と入れ替わって (お前が) 山猟をする  
 「これから私の息子よ、父さんと入れ替わってお前が山猟をするのだ」

- (38) *a=poho utar i=onuytasa kotan epunkine*  
 (私の) 息子 たち (私) ~と入れ替わって 村 ~を守る  
 「私の息子たちが私に代わって村を守った」

参考文献

- REFSING, Kirsten (1986) : *The Ainu Language*, Aarhus University Press.
- 浅井 亨 (1969) : 「アイヌ語の文法 —アイヌ語石狩方言文法の概略—」、アイヌ文化保存対策協議会 (編) 『アイヌ民族誌』、第一法規出版、pp. 771-800.
- 奥田 統己 (1995) : 「アイヌ語静内方言の接続助詞」、『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 1:139-159.
- (1997) : 「アイヌ語静内方言の副助詞と終助詞」、『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 3:195-214.
- (1998) : 「アイヌ語静内方言の後置副詞」、『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 4:127-149.
- 切替 英雄 (1987) : 「アイヌ語は音源をどのように示すか」、『ウエネウサラ』 1:6-8.
- (1989) : 『『アイヌ神謡集』辞典 テキスト・文法解説つき』(北大言語学研究報告2)、北海道大学文学部言語学研究室
- (1996) : 「アイヌ語十勝方言による昔話 『島を引いて泳ぐオタスの少年の物語』の辞典と文法(1)」、『北海学園大学学園論集』 88:123-286.
- 静内町教育委員会 (編) (1991) : 『静内地方の伝承 (I) —織田ステノの口承文芸(1)—』.
- (1992) : 『静内地方の伝承 (II) —織田ステノの口承文芸(2)—』.
- (1993) : 『静内地方の伝承 (III) —織田ステノの口承文芸(3)—』.
- (1994) : 『静内地方の伝承 (IV) —織田ステノの口承文芸(4)—』.
- (1995) : 『静内地方の伝承 (V) —織田ステノの口承文芸(5)—』.
- 田村 (福田) すず子 (1960) : 「アイヌ語沙流方言の助動詞—アイヌ語の助詞についての報告その1—」、『民族学研究』 24/4:67-78.
- 田村すず子 (1988) : 「アイヌ語」(項目)、『言語学大辞典 第1巻 世界言語編 上』pp. 6-94、三省堂.
- (1996) : 『アイヌ語沙流方言辞典』、草風館.
- 知里真志保 (1942) : 『アイヌ語法研究 —樺太方言を中心として—』、『樺太庁博物館報告』 4/4 (参照ページ数は『知里真志保著作集 3』所収のものによる).
- (1953) : 「アイヌ語の助詞」、金田一博士古稀記念論文集刊行会 (編) 『金田一京助博士古稀記念言語民俗論叢』三省堂、pp. 913-932.
- 中川 裕 (1982) : 「アイヌ語の助詞unkについての考察」、『言語学演習' 82』 pp. 90-100、東京大学文学部言語学研究室.
- (1984) : 「アイヌ語の名詞と場所表現」、『東京大学言語学論集' 84』 pp. 149-160、東京大学文学部言語学研究室.
- (1995) : 『アイヌ語千歳方言辞典』、草風館.



## Case Particles in the Shizunai Dialect of Ainu

OKUDA Osami

## Summary :

This is another attempt to describe the Shizunai dialect of Ainu, following on from the author's previous articles "Conjunctionalizers in the Shizunai dialect of Ainu" (1995), "Adverbial Particles and Sentence Final Particles in the Shizunai Dialect of Ainu" (1997) and "Postpositional Adverbs in the Shizunai Dialect of Ainu" (1998) which have been published in the previous issues of this bulletin.

While REFSING (1986) has already presented a comprehensive description of the same dialect, the present author feels that there is room to modify and supplement this work according to the results of his own research. The author surveys the major descriptions of these forms that have been previously published and contrasts the case particles of the Shizunai dialect with those of other dialects.

The present research is largely based on an analysis of folklore texts narrated by Ms. Orita, an Ainu lady who lived in Shizunai district from 1901 to 1993. Amounting to 110,000 tokens, these were recorded on tapes by the Shizunai Board of Education and transcribed and translated into Japanese by the present author. The greater part of these texts have already been published by the Board (1991-1995).

According to the author's definition, case particles are bound forms which mark the cases of the preceding nouns/noun phrases. Almost all examples from the texts express the case relationships between their antecedents and the predicates, but the locative case particle "ta" can also mark its preceding noun as an attribute of the noun which immediately follows it.

As some former researchers have already pointed out, in the Ainu language positional nouns which indicate place, time or positional relationships are distinct not only semantically but also morpho-syntactically from other nouns, i. e. ordinary nouns. Some case particles which have place-related meanings follow only positional nouns while others can follow ordinary nouns. Although the frequency of those particles which can follow ordinary nouns is relatively low, it should be noted that this language has numbers of case-marking free forms which can follow ordinary nouns. Such forms were described as postpositional adverbs in the preceding paper of the author.

Key Words : Ainu language, case marking, case particles, postpositions